

1 ブリストウの悲劇

サー・チャールズ・ボーディンの死

はねをまとった雄鶏は
角笛を吹いて
早起きの村人たちに
夜明けを告げた

エドワード王は 深紅の朝焼けが 5
灰色の空を染めるを見た
カラスがカーカー鳴いて
運命の日を告げるを聞いた

王は言った 「カラスよ その通り
高い玉座にまします神に誓って 10
チャールズ・ボーディンと二人の従者は
今日が確かに最期の日」

家臣たちは 強いエールのジョッキを捧げて
王の側に控えていた
「反逆者ボーディンに伝えよ 今日こそは 15
限りあるやつの命の最期の日」

サー・キャンタロンは 恭しくお辞儀したが
心は嘆きで張り裂けんばかり
サー・チャールズに一目会おうと
城門へと駆け付けた 20

キャンタロンが到着すると
チャールズの二人の子と愛する奥方が
塩辛い涙で床を濡らして
チャールズの命を思って泣いていた

「ああ チャールズ」 キャンタロンは言った 25

「凶報を持って参った」
「ためらうな」 勇敢なチャールズは答えた
「反逆の王は何と言う」

「無念ながら
太陽が西の空に沈む前に 30
名誉にかけて申された
おまえを死刑にせよと」

「死は人の^{さだめ}運命」 勇敢なチャールズは言った
「死など少しも恐れはしない
束の間の命を長らえて 何の益があろう 35
主のお蔭で 覚悟はできている

「わたしの王には決してならぬが おまえの王に伝えよ
今日 わたしは死を選ぶと
大方のように王の奴隷となって生きるよりまし
生き長らえる道は選ばぬ」 40

キャンタロンは外へ出た
すぐさま この地の^{おき}長に知らせて
チャールズの^{いのちご}命乞いに
あらゆる手を尽くすため

^{おき}長カニングは登城し 45
王の前に^{ひざまず}跪いた
「王様のもとへ参りましたは
お慈悲をかけていただくため」

王は言った 「申すがよい
おまえとは長年の友 50
おまえの望みが何であれ
耳貸さぬでもない」

「気高き王様 わたしの願いは
ひとりのりっぱな騎士のこと
その者が図らずも犯した悪は 55

正しきことと信じてのこと

「その者には奥方と二人の子がおります

王様のご決断により

今日 チャールズ・ボーディンを処刑されたら

取り返しつかぬことになりましょう」

60

「邪悪な裏切り者のことを言うでない」

王は怒りに震えて言った

「夜の星が輝く前に

ボーディンの首は^は刎ねられよう

「公正に裁かれたのだ

65

ボーディンは当然の報いを受けるだけ

カニングよ まだ他に

用でもあるか」

「高貴な王様」 カニングは言った

「正義は神にお任せなさって

70

鉄の掟を^{よすが}便とせずに

和平のオリーブの^{しやく}笏をお持ちください

「神が人の心の中をお探しになれば

善人でさえ罪あるはず

キリストの代理 教皇様だけが

75

限りある命の人の中では罪なき人

「生まれたばかりのこの御世を 慈悲を持って治めれば

王冠は確かなものとなりましょう

親から子へと 王様の血筋が

この国を治めることになりましょう

80

「しかし 血と殺戮で

生まれたばかりのこの御世を治めるならば

王様の子々孫々の額には

王冠は永くは載らぬことになりましょう」

「出て行け カニング あの邪悪な裏切り者は 85
わしと権力を嘲笑^{あざわら}った
そのような男のために
どうして温情を願うなどできようぞ」

「高貴な王様 真に勇気のあるものは 90
勇敢な行為を讃うもの
すばらしく気高い心を敬うもの
たとえ敵であったとしても」

「出て行け カニング 天にまします神かけて
わしに命をお与えになった神かけて
ポーディンが生きておるかぎり 95
一切れのパンも口にはすまいぞ

「聖母マリアと 天にましますすべての聖人にかけて
今日の陽^ひがやつの見る最期の光」
カニングは塩辛い涙を落とし
王の前から退いた 100

責め^{さいな}む悲しみに胸ふさがれて
カニングはチャールズのもとへ行った
椅子に座ると
涙が止めどなく流れ落ちた

「死は人の運命^{さだめ}」 勇敢なチャールズは言った 105
「いついかにして迎えようとも
弱く 限りある命の人間には
死こそは運命^{さだめ}

「友よ その正直な魂が
そなたの目から溢れ出る涙を言ってくれ 110
わたしの運命^{さだめ}のために
子どものように泣いておるのか」

カニングは厳^{おごそ}かに言った 「泣いておるのは
そなたの命がこれほど早く失われるから

子どもらと奥方がなす術なく残される 115
それを思うと わしの目は涙に濡れる」

「流れる涙を拭いてくれ
神聖な泉から湧く涙を拭いてくれ
ものともせぬわ
死であれ 反逆の王エドワードの権威であれ 120

「暴君の好むやり方で
わたしの命を終える時
わたしの仕える神は 時措^おかずして
わが子と妻を養ってくださろう

「この世に生を受ける前から 125
これはわたしの運命^{さだめ}
限りある命の人間が恨みつらみを言えようか
神がお決めになることに

「何度戦地を生き長らえたか
何千もの兵が命を落とし 130
深紅の血煙あげて
実り豊かな土地を汚した時でさえ

「わが命はわが手にあらず
一本の矢が空を切り裂き
わたしの胸を射抜いて 135
永遠に目を閉ざしたとて不思議はない

「今になって死を恐れ
青ざめて うろたえるのか
否 子どもじみた恐怖よ わたしの心から去れ
雄々しさを見せつけよ 140

「ああ 神聖なるヘンリー王よ これが神の意志ならば
神があなたと王子をお護りくださいますように
そうでないなら
それもまた 神の御意志」

「誠実な友よ わたしに罪があるとすれば 145
神と前王に仕えてきたこと
エドワードになびかぬことは
死をもって証^{あか}されよう

「ロンドンに生まれ 150
ふた親は名高い血筋
父は高貴な紋章を
鎧の飾りに描いていた

「必ずや 父が逝ったところへ
わたしもまもなく逝けるだろう
そこでは 永遠に祝福され 155
悲しみの手の届くことなし

「父が教えてくれたは
正義と法を情けで繋ぐこと
そしてまた
正義と偽りを見分けること 160

「父が思慮深き手で教えてくれたは
貧しく飢えるものたちに施すこと
召使に 餓えたものたちを
戸口から決して追い払わせぬこと

「誰もが言ってくれよう 165
一生かけて わたしは父の教えを守ったと
夜毎 眠りに就く前には
その日の行いを振り返ったと

「妻に聞いてくれ 170
わたしが裏切ったことがあるかと
仕える王を裏切ったなどと
誰にも言わせぬ

「受難節と聖夜には

肉は口にしなかった
嘆きの世を去る時に 175
何のうろたえることがあろうか

「あるわけがない 不運なヘンリー王よ
その死を見ぬは嬉しきこと
あなたの大義のため
喜んで わたしは死にゆこう 180

「ああ 移ろいやすき民 荒れ果てた国
もはや平和はありえない
敵方リチャード王の子孫たちは意気高揚
川という川に血が流れよう

「言ってくれ この国は尊い平和と 185
高貴なヘンリー王の治世に飽きたのか
平安の日々を
流血と痛みに換えるのか

「台車で引かれて
下賤の手で首^は刎ねられようと 190
反逆者には屈すまい
力では心までは征服できまい

「かまわぬ 柱の上に吊されたまま
手足は腐ってしまうがよい
真鍮の豪華な記念碑に 195
チャールズ・ボーディンの名が刻まれずともよい

「だが 天上の聖なる書に
時さえ朽ち果たしえぬその書の中に
主の僕^{しもべ}とともに
わたしの名が永遠に残ればよい 200

「永遠の命のため 死よ来れ
限りある命を捨てるのだ
さらば 虚しきこの世 愛^{いと}しい者たちよ

息子たちよ 愛する妻よ

「さあ 死よ来れ 205
五月のように喜び溢れた来訪者よ
うつせみの世に生きることなど
妻のもとに留まることなど望まぬわ」

カニングは言った
「あっぱれ 死のご覚悟 210
痛みと嘆きのこの世から
天上の神のもとへ向かわれるとは」

吊いの鐘が鳴り
クラリオンが響き始めた
サー・チャールズは 215
地を蹴る蹄の音を聞いた

役人たちが来る前に
いと
愛しい奥方が入ってきた
偽りのない悲しみの涙を流し
あたりかまわぬ陰鬱な声で嘆きつつ 220

いと
「愛しいフローレンスよ 耐えておくれ
わたしを静かに死なせておくれ
神を讃えよ キリスト者ひとりひとりの魂が
わたしのよう^{いと}に死を静かに見つめるように

いと
「愛しいフローレンスよ なぜ塩辛い涙を流す 225
涙は決意を流してしまう
かわいいおまえとともに
生きたいと この世に留りたいと思わせる

「これは行くべき旅にすぎぬ
祝福の国への旅なのだ 230
さあ 夫の愛の証として
聖なる口づけを受けておくれ」

フローレンスは声つまらせ
震えながら こう言った
「ああ 残酷なエドワード 流血の王よ 235
わたしの胸は張り裂けそう

「ああ ^{いと}愛しいチャールズ
^{いと}愛しい妻を残してなぜ逝くの
あなたの首を^は刎ねる残酷な斧で
わたしの命も断ってちょうだい」 240

処刑場の役人が入って来て
チャールズを連れて行く
チャールズは^{いと}愛しい妻を振り返り
こう言った

「死ぬのではなく 生きるために行くのだ 245
天にまします神を信じよ
主を畏れよと 子どもたちに諭しておくれ
心から主を愛せよと諭しておくれ

「気高く生きよと諭しておくれ
父である このわたしがそうしたように 250
フローレンス 死がおまえを連れ去るまで—さらばだ
役人ども 先導せよ」

フローレンスは狂ったように泣き叫び
髪をかきむしった
「ああ 待って あなた わたしの^{あるじ}主 わたしの命」 255
チャールズは涙を流した

大声で嘆き 疲れ果て
フローレンスは床に倒れた
チャールズは意を決して
戸口から出て行った 260

サー・チャールズは台車に乗った
勇敢で凛々^{りり}しいその姿

通りにいる他の誰より

憂いなきその姿

チャールズの前には議員たち

265

緋色と金色のローブを着て進む

房飾りは陽にきらめき

見るも豪華な様だった

次に 聖アウグスティヌス教会の僧たちが

皆の前に現れた

270

質素な黄褐色の服を着た

聖なる僧たち

聖なる賛美歌を

彼らは甘美に合唱した

その後ろには 六人の吟遊詩人たち

275

弦楽器を奏でていた

次に 二十五人の射手

それぞれが弓を構えていた

ヘンリー王一派の処刑の邪魔を阻止せんと

チャールズ救出を阻止せんと

280

チャールズは獅子のように勇ましく

布の敷かれた台車に乗って到着した

白い飾りの黒馬二頭

馬の頭には羽根飾り

その後ろには さらに二十五人の

285

屈強の射手が行進した

手には引きしぼった弓を持ち

勇敢な出立ち

次に 聖ジェイムズ教会の僧たち

ひとりひとりがうたう歌は和していた

290

その後ろには 六人の吟遊詩人たち

弦楽器を奏でていた

次に 市長と長老たち
緋色の衣をまとい
それぞれ 従者を従えて 295
東洋の王子のような装い

その後ろには 大群衆
人々が続々とつめかけた
窓という窓は人で溢れ
その中をチャールズは行進した 300

十字架のところまで来たときに
チャールズは振り返って言った
「人を罪から救われるお方
どうか わたしの魂を清めてください」

巨大な寺院の窓辺の 305
権力の椅子に座った王は
チャールズ・ボーディングが
^{いさぎよ}潔く運命にしたがう様を見た

ほどなく台車は
エドワード王に声の届くところまで近づいた 310
勇敢なチャールズは立ち上がり
こう言った

「エドワードよ わたしを見よ 邪悪な反逆者よ
不名誉を曝^{さら}したものよ
不誠実の輩^{やから}よ 315
わたしは今 おまえよりも偉大である

「汚いやり方で 殺人で 流血で
今や王冠を手に入れ
わたしの死刑を宣告した
本来なら その力もないものを 320

「今日がわたしの最期と置いていようが

死んでいたのは むしろ今まで
この頭に永遠の冠を戴くため
まもなく蘇るのだ

「おそらく 何年かは 325
この移り気の国を治められよう
真の王と暴君の支配がいかに異なるか
民にその差を知らしめることにあいなろう

「権力ゆえの不正 反逆ゆえの隷属^{れいぞく}が
いつの日か その身に下^{くだ}るであろう」 330
王の耳にその声が届かぬところへ
台車は進んだ

エドワード王の心の内はありありと顔に表れた
王は振り返って
弟のグロスターに向かって 335
こう言った

「やつには 恐ろしい死でさえも
身の毛のよだつ恐怖は与えられまい
やつを見よ あいつは真実を語った
やつは王より偉大なのだ」 340

「だからこそ処刑を」 リチャード伯が言った
「われわれの敵は ひとり残らず
血なまぐさい斧の下 首^はを刎ね
死肉をカラスに食わせましょう」

馬はゆっくりと 345
チャールズを小高い丘へと引いてゆく
斧はぎらぎら陽^ひに光る
尊い血^{ほとぼし}を 迸^はらせんと

チャールズは断頭台へと上っていった
その様は金箔の車に乗るかのよう 350
勇敢な武将たちの勝利の車

流血の戦場で勝ち取った車に乗るかのよう

群衆に向かい チャールズは言った
「ヘンリー王に忠実に仕えたため
義にしたがったため 355
死んでゆくわたしを見よ

「エドワードがこの国を治める限り
平和は戻って来ぬであろう
息子や夫は戦死させられ
川は血の色に染まるであろう 360

「善良で法を重んじた王を
逆境の時に見捨てたのがおまえたち
わたしに倣い^{なら} 正義を貫き
それがためには死を選べ」

司祭と共に膝をついて 365
神への祈りをささげた
離れゆく魂が神のもとへ
連れて行かれますようにと

それから チャールズは膝を折って
恭^{うやうや}しく処刑台の石に頭を載せた 370
みごとなまでの一撃で
辣腕^{らつわん}の首切人はチャールズの首を刎^はねた

血が^{ほとばし} 迸り
処刑台のまわりに流れ出した
その血を雪^{すす}ぐほどに 375
群衆は涙を流した

血のしたたる斧は チャールズの胴体を
みごとに四つ割りにした
四肢と頭はそれぞれに
杭の先に刺された 380

キーンウルフの丘で ひとつは腐り
大聖堂の塔の上で ひとつは腐り
城壁の外へ ひとつは放られて
カラスの餌食となり果てた

もうひとつは 聖パウロ教会の荘厳な門の上 385
身の毛もよだつ光景だった
頭は十字架の上に晒された
目抜き通りの四辻に

チャールズの運命の話はこれでお終しまい
神が我が王を永く栄えさせますように 390
天国で サー・チャールズ・ボーディンの魂に
神のお慈悲をうたわせてくださるように

(中島久代訳)